

北海道科学大学附属薬局における  
施設間情報連絡書を用いた情報共有の取り組みに関するアンケート調査

Questionnaire Survey on the Effects of Information Sharing Using Information  
Liaison Forms at Hokkaido University of Science Affiliated Pharmacy

山 佳織\*, 中根 芳樹\*\*, 原 秀之\*\*, 花見 麻帆\*\*,  
清水 敦也\*\*\*, 眞鍋 智裕\*\*, 長谷川 功\*\*\*, 佐藤 秀紀\*

Kaori Yama, Yoshiki Nakane, Hideyuki Hara, Maho Hanami,  
Atsuya Shimizu, Tomohiro Manabe, Isao Hasegawa, Hideki Sato

**Abstract**

Recently, Information Liaison Form (Tracing Report) has been developed as a means of improving cooperation between community and hospital pharmacists and to transmit important information on the efficacy and safety of drug treatments in community pharmacies and hospitals. At the Hokkaido University of Science Affiliated Pharmacy (Pharmacy), information on chemotherapy for outpatient cancer treatment is communicated by a Tracing Report from the JR Sapporo Hospital. In this study, we surveyed about the contents of the Tracing Report against information provided by the community pharmacists. The subjects included 19 pharmacists who were involved in the operation of the Tracing Report. The number of respondents was 16, and the response rate was 84%. Information sharing between community and hospital pharmacists using the Tracing Report contributed to the quality and efficiency of the services of community pharmacists and led to early discovery of adverse drug reactions and early intervention, early response, and promotion of appropriate drug therapy. Information sharing by the Tracing Report may contribute in improving the efficiency of information collection and quality of providing instructions for drug administration and build a relationship of trust between the pharmacists and patients. Thus, we can contribute to ensuring the quality of medical care and improving medical safety. In future, we are continuing to operate the cooperation between community and hospital pharmacists using the Tracing Report.

**緒言**

近年、薬局と病院とで、患者の薬物療法に関する有効性・安全性についての重要な情報を確実に伝えるために、双方向の情報共有手段として施設間情報連絡書（以下、トレーシングレポート）を用いた薬

薬連携が進められている。トレーシングレポートとは、服薬情報提供書を指し、調剤薬局で緊急性・即時性は低いものの患者の薬物療法について有用な情報を得た際に、処方医へその情報を伝えるために用いるツールである<sup>(1)</sup>。トレーシングレポートの活用

\* 北海道科学大学薬学部

\*\*北海道科学大学附属薬局

\*\*\*JR 札幌病院薬剤科

により、薬局において通常の服薬指導の際には得ることが難しい患者情報や処方背景などの情報を手に入れやすくなり、服薬指導に役立てることが可能となった。さらには、病院においても薬局からの外来患者情報をフィードバックにより収集することで、次の診療や処方に役立てることが可能となることから、より適切な治療を提供できることが期待されている。

北海道科学大学附属薬局（以下、附属薬局）では、近隣病院である JR 札幌病院から薬業連携の一環としてトレーシングレポートによる外来がん化学療法の情報提供を受けている。この取り組みにより、病院と調剤薬局間で連携関係を構築し、患者への適切な薬物治療を提供することを試みている。しかし、トレーシングレポートによる情報が患者への適切な薬物療法に役立てられているかは不明である。実際、トレーシングレポートの記載内容の検討や活用事例の報告は依然として少ない<sup>(2, 3)</sup>。また、受け取り側の薬剤師がどのような情報を必要としているか十分に把握できていないため、トレーシングレポートを十分に活用できていない可能性が考えられる。そこで、トレーシングレポートのブラッシュアップと最大限の有効活用を目的として、調剤薬局薬剤師に対してトレーシングレポートの記載内容に関するアンケート調査を行った。今回、その結果を報告する。

## 方法

### 1. 対象

対象は、2019年12月（アンケート調査実施月）に、JR札幌病院と近隣調剤薬局2件（附属薬局を含む）におけるトレーシングレポートの運用に携わった調剤薬局薬剤師19人とした。著者らが、対象調剤薬局薬剤師に対し直接説明を行い、アンケート調査用紙配布後、記入済みの用紙を回収できた場合を同意が得られた対象者とする事とした。

### 2. トレーシングレポートの作成

トレーシングレポートは、日本薬剤師会および日本病院薬剤師会が公開している連絡書を元に作成した<sup>(4)</sup>。トレーシングレポートには、病院からの患者

情報、検査値、情報提供内容、通信欄に調剤薬局からの返信内容が記載されている（図1A）。また、調剤薬局からの発信の内容としては、情報提供内容、通信欄（病院からの返信内容）が記載されている（図1B）。

### 3. トレーシングレポートの運用

JR札幌病院の薬剤師がトレーシングレポート作成の同意を患者またはその家族から取得し、処方箋発行時の関連項目（患者背景、レジメンなど）をトレーシングレポートに記載する。抗がん剤治療薬の追加や中止・投与量の増減、服用間隔の変更、病院における患者指導内容・注意点、検査値、病名、治療方針、調剤薬局において指導あるいは注意してほしい点に関しては、病院薬剤師がその必要性を判断し、トレーシングレポートに記載を行っている。病院薬剤師は処方箋発行時に、患者またはその家族に対し、処方箋を持参する調剤薬局を聴取し、調剤薬局にFAXにてトレーシングレポートを送付している。また、近隣調剤薬局においても服薬指導の際に得られた薬物治療の適正化に役立つ服薬状況などの情報について調剤薬局発信としてトレーシングレポートを発行する場合もある（図2）。

### 4. トレーシングレポートに関するアンケートの作成

アンケート調査項目は、鈴木らの報告を参考に選定し、アンケート調査表を作成した<sup>(2)</sup>。アンケート内容を図3に示す。アンケート回収後、各項目における記載内容の集計を行った。アンケート調査表の記載項目は、自由記載欄を含めて全12項目とし、トレーシングレポートを受け取り、実際にトレーシングレポートに記載された情報を元に調剤・鑑査、または服薬指導を行った経験の有無、トレーシングレポートに基づいた疑義照会の経験の有無（ある場合は、その具体的な内容と処方変更の有無について）、副作用の早期発見や対応に繋がった経験の有無（ある場合は、その具体的な内容を含む）、変化した項目について（患者情報の収集が効率化された、調剤がしやすくなった、処方監査の質の向上、服薬指導の質の向上、薬の副作用や効果の確認が容易に

行えるようになった、薬剤服用歴の管理の質の向上、処方経緯や処方意図が把握しやすくなった、不要な疑義照会の件数の減少、患者との信頼関係の向上、医師への処方提案や情報提供の機会の増加、その他)、今後も継続したトレーシングレポートによる情報提供の希望、トレーシングレポートに記載が必要と思われる項目について[院内で受けている抗がん剤治療の用法用量、外来で受けている内服抗がん剤のレジメン、外来で受けている内服抗がん剤の投与間隔やサイクル数、入院時あるいは受診時の副作用歴、処方薬の中止、増量・減量に関する情報、特別な用法用量で処方されている薬剤の処方意図、服薬遵守状況、服薬内容の理解度、主要な検査値(血液検査項目、腎機能など)、次回来院予定日、病名、患者の服薬指導上注意すべき事項(病名告知の有無、プラセボ投薬など)、その他]とした。また自由記載欄として、トレーシングレポートに関する希望、改善点、トレーシングレポートに関するメリット・デメリットを挙げた。

## 5. 倫理的配慮

本研究は「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」には該当しない。アンケート調査は無記名方式で行い、個人のプライバシー・個人を特定できないように配慮した。さらに、インフォームドコンセントとして、目的、方法、自由意志による同意、プライバシー保護について文書で説明し、アンケートの回答、提出をもって本研究への同意取得とした。

## 結果

### 1. トレーシングレポートの運用実績

トレーシングレポートは、2018年10月からJR札幌病院薬剤科より運用が開始され、2020年7月までの期間における附属薬局を含む近隣調剤薬局での対象患者数は79人であった。また、調剤薬局からJR札幌病院へのトレーシングレポートの発行枚数は6件であり、そのうち4件が附属薬局からの発行であった。

### 2. アンケート結果

アンケート回答者数は16件であり、回収率は

84%であった。トレーシングレポートの活用についてのアンケート集計結果を表1に示す。トレーシングレポートに記載された情報を元に調剤・鑑査、または服薬指導を行ったことがある調剤薬局薬剤師は16人中13人(81.3%)であった。そのうち、トレーシングレポートがきっかけで疑義照会を行ったことがある人は1人(6.3%)であったが、処方変更には至っていなかった。さらに、副作用の早期発見や対応に繋がった人は5人(31.3%)であった。今後もトレーシングレポートによる情報提供を希望するかという問いについては15人(93.8%)が希望すると回答し、継続を希望しないと回答した調剤薬局薬剤師はいなかった。

また、トレーシングレポートによる情報共有により変化した事項を図4に示す(複数回答可)。回答者16人中、患者情報の収集の効率化11人(68.8%)、調剤がしやすくなった6人(37.5%)、処方監査の質の向上13人(81.3%)、服薬指導の質の向上12人(75.0%)、薬の副作用や効果の確認が容易になった10人(62.5%)、薬剤服用歴の管理の質の向上5人(31.3%)、処方経緯や処方意図が把握しやすくなった12人(75.0%)、不要な疑義照会件数の減少5人(31.3%)、患者との信頼関係の向上2人(12.5%)であり、医師への処方提案や情報提供の機会の増加を挙げた人はいなかった。

次に非常に必要、必要、どちらでもない、あまり必要ない、まったく必要ないの5段階でトレーシングレポートに記載が必要な項目を評価した。院内で受けている抗がん剤治療の用法用量、外来で受けている内服抗がん剤のレジメン、外来で受けている内服抗がん剤の投与間隔やサイクル数、入院時あるいは受診時の副作用歴、処方薬の中止、増量・減量に関する情報、特別な用法用量で処方されている薬剤の処方意図については16人中全員が非常に必要あるいは必要と回答した(図5)。また、必要と回答した項目は、服薬遵守状況13人、服薬内容の理解度14人、主要な検査値(血液検査項目、腎機能など)15人、次回来院予定日14人、病名16人、患者の服薬指導上注意すべき事項(病名告知の有無)2人

であった。また、自由記載項目においては、希望に関して、レジメン変更や増量・減量などの情報提供およびその理由の記載、特殊なレジメンの処方意図に関する記載、副作用の評価に使う指標の病院と近隣調剤薬局で共通化により副作用対策に生かす、患者 ID 番号は薬局と病院とで連動していないことにより事前の処方箋特定が難しいため、イニシャル等の記載の希望、全ての外来患者についてトレーシングレポートがあるとさらに業務に役立てることができるといった意見が挙げられた。また改善点として、初回のトレーシングレポートだけではなく 2 回目、3 回目と継続した情報の共有化(治療奏功の有無やその根拠となる検査数値、副作用の発症度合・頻度など)が挙げられた(表 2)。

トレーシングレポートに関するメリット・デメリットについては、メリットとして、「病名、体重、体表面積の記載があると、抗がん剤の用量が適切であるか判断できるため、確認のために疑義照会で患者を待たせることなくスムーズに必要な事項を確認し、投薬することができる」、「抗がん剤のレジメン、投与間隔、本人の理解度などの情報が把握できるため、投薬をスムーズに行うことができ、必要な情報を得られやすくなる」、「投与量やレジメンを把握することができるので患者との確認がしやすい」、「処方経緯や処方意図が分かることで、適切な監査を行えるようになった」、「薬や副作用の説明など病院と調剤薬局で共有でき、患者に安心して薬を服用してもらえた」、「事前に患者の情報を知ることができ、服薬指導の質の向上に繋がった」、「患者が正しく治療を理解しているか確認しやすくなった」、「検査値の記載により、副作用の判断が客観的にできるようになった」などが挙げられた。その一方でデメリットとして、「トレーシングレポートで報告すべきか疑義照会すべき内容か判断に迷うことがある」ことが挙げられた(表 3)。

## 考察

医薬分業の発展により院外処方箋発行枚数が増加した。さらに、経口抗がん剤の承認数の増加に伴い、

外来で経口抗がん剤による治療を行う患者数は劇的に増加した。抗がん剤による治療は、外来化学療法が中心となってきている。そのため、がん患者が以前と比べて調剤薬局に訪れる機会が増えた。しかし、日本病院薬剤師会平成 24 年度学術委員会学術第 3 小委員会報告において、経口抗がん剤のみの患者への説明・教育について、「すべての患者に実施している」と「説明・教育はしていない」が初回導入時は 9.1%、29.2%であり、治療継続時は 1.6%、53.2%であった<sup>(5)</sup>。このように通常の病院業務において患者に対する抗がん剤の説明・教育が十分に行っているとは決して言えない。特に抗がん剤に関しては、その医薬品の特性からも副作用発現頻度が高く、調剤薬局薬剤師が経口抗がん剤服用患者に対して、安全な薬物治療を行えるよう支援することが必要であり、調剤薬局の大きな役割であると考えられる。その使命を果たすためにも、病院と調剤薬局の双方向の連携構築は重要である。

実際、調剤薬局薬剤師は、外来がん化学療法施行中の患者から必要な情報を得ることは難しいと感じており、限られた情報で業務を行っている<sup>(6)</sup>。近年、トレーシングレポートの有用性を検討した論文が複数報告<sup>(1, 2, 3)</sup>され、調剤薬局薬剤師の質の向上やより安全性の高い、適切な薬物治療の充進に貢献している。厚生労働省はかかりつけ薬剤師や調剤薬局が持つべき機能として、薬物療法の有効性と安全性を確保するためには服薬情報の一元化と継続的な把握が必要としている<sup>(7)</sup>。そのため、調剤薬局と病院間の断片的な薬や治療に関する一般的な情報だけではなく、薬の変更点や治療の経緯、検査値、処方意図、治療レジメンなどの情報共有を継続的に行うことは重要であると考えられる。本研究においても、患者情報の収集の効率化、処方監査の質や服薬指導の質の向上、薬の副作用や効果の確認が容易になった、処方経緯や処方意図が把握しやすくなったが挙げられ、引き続きトレーシングレポートによる情報提供を希望していた(図 4)。通常、調剤薬局で処方箋を応需した際には、病名や現在の治療方針、治療方法、治療レジメン、投与スケジュールなどに関する

情報は患者本人から聴取する他ない。特に投与量や投与スケジュールに関しては、患者の状態に応じて変更されている場合もあり、調剤薬局において情報を完全に把握することは困難である<sup>(8)</sup>。そのため、トレーシングレポートの記載項目に関しては、レジメン名や経口抗がん剤投与量算出に関わる主な検査値、また、情報提供欄には、病院外来での服薬指導内容、投与スケジュール、またその変更があった場合の理由の記載、調剤薬局において患者本人に確認してほしいことなどを中心に記載した(図1)。本研究においても、投与量スケジュールを含めたレジメン情報や検査値情報、副作用情報、服薬情報などについて調剤薬局薬剤師は必要としていた(図5)。このことは、調剤薬局薬剤師が患者から得られる情報が通常限られており、適切な薬物療法を提供するための患者への服薬指導が十分に行えていないことや患者へのアプローチに迷うということ、処方箋発行病院と調剤薬局での説明の食い違いによる患者への不要な不安を与えてしまう懸念から生じている調剤薬局薬剤師の不安が反映されている可能性が考えられる。

調剤薬局薬剤師による病院への患者情報のフィードバックの必要性は、病院薬剤師においてより強く感じられているとの報告がある<sup>(6)</sup>。近年、トレーシングレポートを活用した調剤薬局から病院への情報伝達効果について多くの報告がなされており、吉留らは経口抗がん剤服用外来患者における運用の有用性を報告している<sup>(8)</sup>。JR 札幌病院と近隣調剤薬局においてトレーシングレポートを用いた双方向の情報提供とフィードバックを継続して行えていることから、トレーシングレポートの運用が浸透し、患者に対する適切な薬物療法の提供に役立っている可能性が反映されていると考えられる。

調剤薬局薬剤師からの要望としては、レジメン変更や増量・減量などの情報についての詳しい記載、特殊なレジメンの処方意図の記載など、レジメンの情報に関する記載が挙げられた(表2)。現状、それらの記載に関してはトレーシングレポートの情報提供内容に記載されているものの、内容については

病院薬剤師の裁量に委ねられてしまう。そこで改善点として、トレーシングレポートに「レジメン変更・変法に関する情報提供と処方意図」という欄を設けることとした。また、副作用の評価に使う指標を処方箋発行元の病院と近隣調剤薬局で共通化し、トレーシングレポートに活用することで副作用対策に生かす、という点に関しては、病院と調剤薬局で共通で使用できるがん治療薬による副作用を自己評価できる Pro-CTCAE を用いた評価指標を作成し、抗がん剤服用患者の副作用の把握を病院と調剤薬局とで共通で把握できるように現在試みている。また改善点に関して、初回のトレーシングレポートだけではなく2回目、3回目と継続した情報の共有を行うことに関しては、病院側からトレーシングレポートを発行する際に前回と共通の ID を使用し、情報提供内容欄に継続患者であることを明記することとした。

薬剤師法 24 条においては、「薬剤師は、処方せん中に疑わしい点があるときは、その処方せんを交付した医師、歯科医師又は獣医師に問い合わせ、その疑わしい点を確認した後でなければ、これによって調剤してはならない」と定められている。しかし実際は、院外処方箋を応需する調剤薬局では、投薬時の患者面談や薬歴からは限られた情報しか得られず、処方内容からだけでは患者の状態に応じた適切な薬物治療であるか確認、判断することは難しい。トレーシングレポートには、調剤薬局薬剤師が即時性は低いが患者の薬物療法の有効性・安全性に必須な情報を得た場合に、FAX を用いて処方医にその内容について確実に伝えるために用いられるツールという側面もある<sup>(1)</sup>。森田らによると、薬剤師によるトレーシングレポートを用いた情報伝達の取り組みが正しい薬物治療の継続に有用であることが報告されている<sup>(9)</sup>。病院薬剤師と調剤薬局薬剤師とで情報共有することにより、抗がん剤の薬物治療において可能な限り安全性の高い、適切な薬物治療を受けられるよう支援できると考えられる。

鈴木らはトレーシングレポートを用いた病院と調剤薬局の情報共有の取り組みの有用性評価について調剤薬局薬剤師を対象にアンケート調査を行い、報

告している<sup>(2)</sup>。本研究においても、トレーシングレポートを用いた病院薬剤師と調剤薬局薬剤師間の情報共有は、調剤薬局薬剤師の業務の質や効率向上に寄与し、副作用の早期発見や早期対応、適切な薬物療法の推進に繋がることが明らかとなった。トレーシングレポートを用いた情報共有を行うことで、かかりつけ薬局が求められている機能を発揮することが可能となり、地域包括ケアシステムを構築するうえで有用な取り組みであると評価することができる。

本研究においては医師への処方提案や情報提供増加に繋がったと答えた調剤薬局薬剤師はいなかった。その要因として、アンケート調査実施段階では処方箋への検査値記載を行っておらず、処方提案を行いやすい環境になかったことが考えられる。現在、JR札幌病院から発行される院外処方箋には検査値が記載されており、今後副作用やアドヒアランスの確認に役立てることにより医師への処方提案や情報提供が行いやすい環境となることが期待される。

現在、抗がん剤<sup>(10)</sup>やヒト免疫不全ウイルス治療薬<sup>(11)</sup>など特定の疾患を対象とした薬薬連携、医薬連携は進んでいるが、すべての疾患患者への連携を拡大するには至っていない。トレーシングレポートを用いて情報共有を図ることは、薬物治療を受ける全ての患者にとって薬物療法の適正化や医療安全の向上に必要であると考えられる。

今回、附属薬局とJR札幌病院において、トレーシングレポートのやり取りを行うことにより、安全で安心な医療が提供できる体制が整いつつある。実際、抗がん剤による治療を受けている患者を対象とした薬薬連携、医薬連携は進んでいる<sup>(10)</sup>。鈴木によると、トレーシングレポートを用いた病院薬剤師と調剤薬局薬剤師の情報共有は、調剤薬局薬剤師の業務の質や効率向上により、副作用の早期発見や早期対応、適切な薬物療法の推進に貢献することを報告している<sup>(2)</sup>。事前にトレーシングレポートの内容を確認することで効率的に情報収集ができ、服薬指導の際に副作用の発現の有無や有効性の確認を行うことで医療の質の担保や医療安全の向上に貢献できると考えられる。

2020年度に新設された特定薬剤管理指導加算2は、「診療報酬の連携充実加算を届け出ている医療機関で抗悪性腫瘍薬を注射された癌患者に、抗悪性腫瘍薬や制吐薬などを調剤する調剤薬局の薬剤師が、レジメン（治療内容）を踏まえて必要な薬学的管理や服薬指導の他、電話などを使った副作用などのフォローアップを行った場合」において算定されることから、抗がん剤の治療において連携がより進むものと期待される。このような状況で、トレーシングレポートによる情報共有を行うことは、調剤薬局薬剤師の情報収集の効率化や服薬指導の質の向上、患者との信頼関係の構築に貢献し、有効な手段になると考えられる。現在、連携強化の一環として、運用されているレジメンやトレーシングレポートの内容に関する情報交換会、ブラッシュアップなどをJR札幌病院と他の近隣調剤薬局を含めて情報共有を行っている。今後も連携強化のツールとしてトレーシングレポートを継続的に進めていくためにも、病院薬剤師と調剤薬局薬剤師とで交流を密にすることや情報交換の機会を多く設けることが重要であると考えられる。

本研究の限界として、回答を得た近隣調剤薬局が附属薬局を含め2件であるということ、回答が得られた調剤薬局薬剤師の人数が少数であるということが挙げられる。そのため、今後もトレーシングレポートの発行を病院および調剤薬局で積極的に行い、記載内容のブラッシュアップを定期的に行うことにより更なる有用性の評価を行うことが課題である。

## 謝辞

アンケート調査にご協力いただきました、調剤薬局薬剤師の皆様には深く御礼申し上げます。

## 参考文献

- (1) 松原和夫, 栗屋敏雄, 米澤淳: 京都大学医学部附属病院でのトレーシングレポート活用事例, 薬局, 67, 10, 96-102, 2016.
- (2) 鈴木亮平, 垣越咲穂, 佐合健太, 脇田恵里, 中村あゆみ, 平野淳, 長岡宏一, 深津哲: 施

- 設間情報連絡書を利用した病院薬剤師と保険薬局薬剤師の情報共有の有用性評価, 日本病院薬剤師会雑誌, 55, 6, 637-642, 2019.
- (3) 鈴木亮平, 脇田恵里, 垣越咲穂, 中村あゆみ, 平野淳, 長岡宏一, 深津哲: 施設間情報連絡書を用いた情報共有の有用性に関する検討, 日本病院薬剤師会雑誌, 54, 7, 825-833, 2018.
- (4) 日本病院薬剤師会: 薬剤適正使用のための施設間情報連絡書, 2020年1月10日, <http://www.jshp.or.jp/banner/guideline.html>
- (5) 松尾 宏一、飯原 大稔、緒方憲太郎、川上和宜、組橋 由記、黒田 純子、林 稔展、日置 三紀、吉村 知哲、米村 雅人: 平成24年度学術委員会学術第3小委員会報告 外来化学療法における薬剤師の業務展開に関する調査・研究
- (6) 石橋正祥, 石井正和, 長野未来, 木内祐二, 巖本三壽: 外来がん化学療法における薬薬連携に関するアンケート調査-保険薬局薬剤師, 病院薬剤師が相互に求める業務の比較-, Yakugaku zasshi, 138, 425-435, 2018.
- (7) 厚生労働省: 患者のための薬局ビジョン, 2020年1月10日, [https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11121000-lyakushokuhinkyoku-Soumuka/gaiyou\\_1](https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11121000-lyakushokuhinkyoku-Soumuka/gaiyou_1).
- (8) 吉留実慧子, 三宅麻文, 松山怜奈, 楠本知代, 岩井惇子, 西山啓介, 小林和博, 伊藤俊和, 近藤篤, 上田覚, 石川弘子, 河原宏之, 尾上雅英: 保険薬局による電話連絡とトレーニングレポートを利用した経口抗がん剤服用外来患者に対する情報提供方法の確立, 医療薬学, 42, 6, 476-482, 2016.
- (9) 森田春香, 吉川明良, 齋藤綾, 開浩一: 脳神経外科病棟における「薬剤情報提供書」を用いた転院時の取り組み, 日本病院薬剤師会雑誌, 53, 6, 698-702, 2017.
- (10) 壁谷めぐみ, 日比聡, 湯浅周, 井上博貴, 齋藤明子, 伊奈研次: がん患者・保険薬局薬剤師のアンケート調査結果に基づいて作成した病薬連携連絡票, 医療薬学, 41, 4, 275-282, 2015.
- (11) 松井綾香, 濱野有里, 野村直幸, 岩井初子, 堀田修次, 國原将洋, 立花広志: HIV 感染症患者に対する薬薬連携の取り組み, 広島県病院薬剤師会誌, 51, 3-7, 2016.

(A)

施設間情報連絡書  
(トレーシングレポート)

下記患者様の投薬状況についてご連絡申し上げます。  
お気づきの点がございましたら、主治医へ報告いたしますのでFAXにてご返信願います。

診療科	ID	名前	性別	生年月日
処方日		レジメン名		
連絡事項 (病院→保険薬局)				
【基本データ】 H T :                    cm B W :                    kg B S A :                    m2				
【血液検査データ】 CRE :                    AST / ALT :                    /                    T-Bil : eGFR :                    WBC/Neu :                    /                    Hb :                    PLT :				
【備考】				
病 院 名 :		担 当 薬 剤 師 名 :		
連 絡 先 T E L :		F A X :		

通信欄 (保険薬局→病院)	
薬 局 名 :	担 当 薬 剤 師 名 :
連 絡 先 T E L :	F A X :

(B)

施設間情報連絡書  
(トレーシングレポート)

下記患者様の状況について連絡します。

連絡日				
診療科	ID (JR札幌病院)	名前	性別	生年月日
連絡事項 (保険薬局→病院)				
薬 局 名 :				
担 当 薬 剤 師 名 :				
連 絡 先 T E L :				
F A X :				

通信欄 (病院→保険薬局)	
病 院 名 :	担 当 薬 剤 師 名 :
連 絡 先 T E L :	F A X :

図1 トレーシングレポート

- (A) 病院から薬局へ発信
- (B) 薬局から病院へ発信

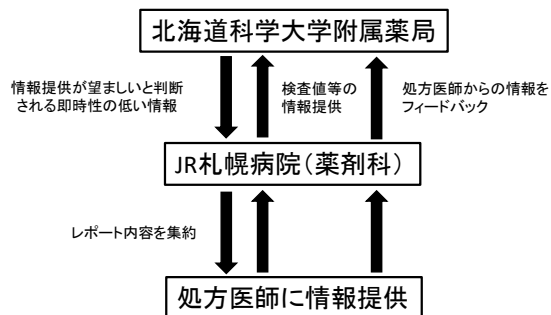


図2 トレーシングレポートの運用



【トレーシングレポート活用に関するアンケート】

問1～6の項目についてお答えください。回答は、該当する項目に☑を付けて下さい。

問1. トレーシングレポートを受け取り、実際にトレーシングレポートに記載された情報を元に調剤・鑑査、または服薬指導を行ったことがありますか。

ある(問2へ) ない

問2. 薬剤師としての経験年数をお答えください。

1年未満 1年以上5年未満 5年以上10年未満 10年以上

問3. トレーシングレポートがきっかけで、疑義照会を行ったことがありますか。

ある ない

\* あると答えた場合は、その具体的な内容と処方変更の有無をお答え下さい。

具体的な内容( )

処方変更: あり なし

問4. トレーシングレポートによる情報提供がきっかけで、副作用の早期発見や対応に繋がったことがありますか。

ある ない

\* あると答えた場合は、その具体的な内容をお答え下さい。

具体的な内容( )

問5. トレーシングレポートによる情報共有を行うことで、変化した事項があれば全て選択してください。

患者情報の収集が効率化された。

調剤がしやすくなった。

処方監査の質が向上した。

服薬指導の質が向上した。

薬の副作用や効果の確認が容易に行えるようになった。

薬剤服用歴の管理の質が向上した。

処方経緯や処方意図がわかりやすくなった。

不要な疑義照会の件数が減少した。

患者との信頼関係が向上した。

医師への処方提案や情報提供をすることが増えた。

その他( )

問6. 今後もトレーシングレポートによる情報提供を希望しますか。

希望する どちらでもない 希望しない

問7～11のトレーシングレポートに記載が必要な項目についてお答え下さい。

問7. 薬について

A. 院内で受けている抗がん剤治療の用法用量

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

B. 外来で受けている内服抗がん剤のレジメン

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

C. 外来で受けている内服抗がん剤の投与間隔、サイクル数

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

D. 入院時あるいは受診時の副作用歴

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

E. 処方薬の中止、増量・減量に関する情報

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

F. 特別な用法用量で処方されている処方薬の処方意図

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

問8. 服薬状況について

A. 服薬遵守状況

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

B. 服薬内容の理解度

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

問9. 検査値

A. 主要な検査値(血液検査項目、腎機能など)

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

問10. その他

A. 次回来院予定日

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

B. 病名

5. 非常に必要  4. 必要  3. どちらでもない  2. あまり必要ない  1. まったく必要ない

C. 患者の服薬指導上、注意すべき事項

Ex.)病名告知の有無、プラセボ投薬など

D. その他( )

問11. トレーシングレポートに関して希望、改善点などがあれば、自由に記載して下さい。

問12. トレーシングレポートに関してメリット・デメリットがあれば自由に記載してください。

ご協力ありがとうございました。

図3 トレーシングレポート運用に関するアンケート

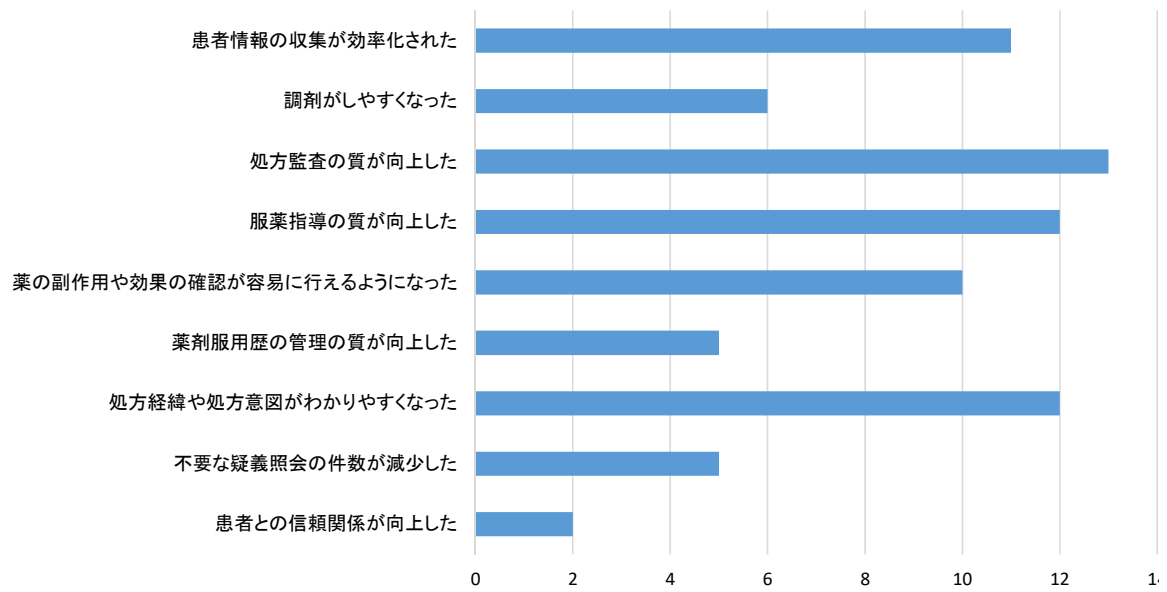


図4 トレーシングレポートによる情報共有により変化した項目

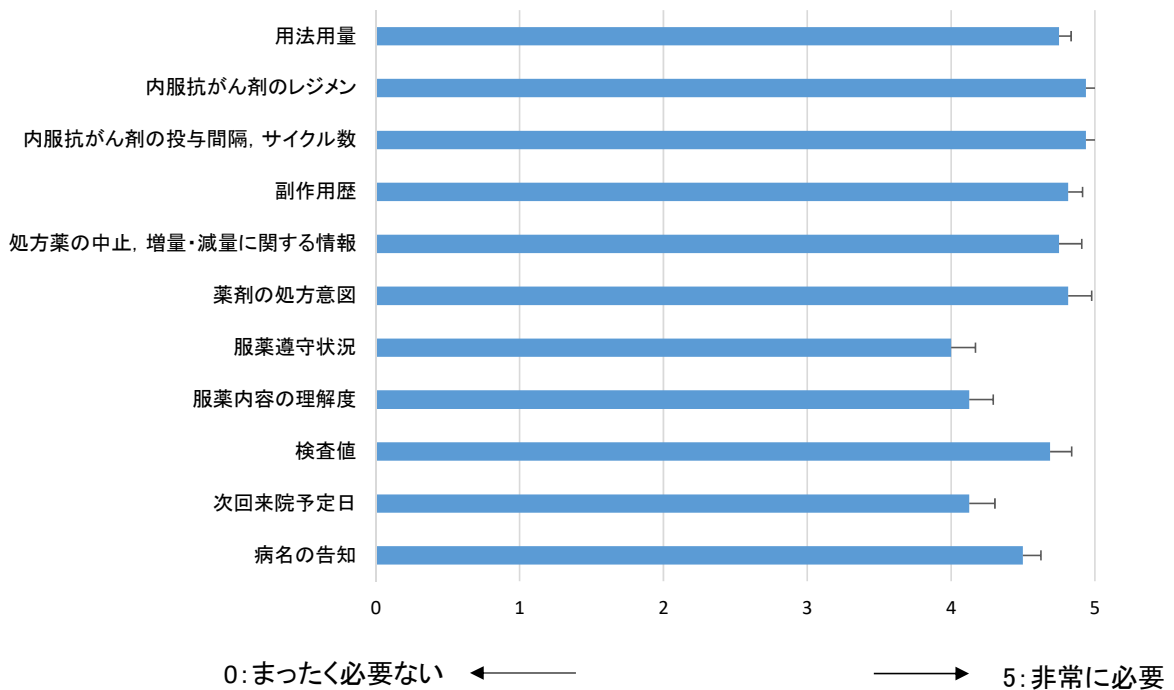


図5 トレーシングレポートに記載が必要な項目についての調査

表1 トレーシングレポートの活用に関するアンケート結果

調査項目	回答		
	有り(%)	無し(%)	無回答(%)
情報を元に服薬指導等への利用 (n=16)	13(81.3)	3(18.7)	-
疑義照会の実施 (n=16)	1(6.3)	14(87.4)	1(6.3)
副作用の早期発見や対応への関与 (n=16)	5(31.3)	10(62.4)	1(6.3)
継続的な情報提供の希望 (n=16)	15(93.7)	-	1(6.3)

表2 トレーシングレポートの希望・改善点

トレーシングレポートの希望・改善点の内容

- ・レジメン変更や増量、減量などについて理由を含めて詳しい情報の記載と特殊なレジメンの処方意図の情提供を希望する。
- ・副作用の評価に使う指標の病院と近隣調剤薬局で共通化により副作用対策に活かしたい。
- ・患者ID番号は薬局と病院とで連動していないことにより、事前の処方箋特定が難しいためイニシャル等の記載の希望。
- ・レジメン変更、減量、中止の理由を記載していただくと役立つ(何が原因によって、服薬指導のアプローチの仕方が変わるため)。
- ・全ての外来患者のトレーシングレポートをもらえると、さらに業務に役立てることが可能である。
- ・レジメン変更や増量、減量などについて詳しい情報の記載と特殊なレジメンの処方意図の情提供を希望する。
- ・初回のトレーシングレポートだけでなく2回目、3回目と継続した情報の共有化(治療奏功の有無やその根拠となる検査、数値、副作用の発症度合・頻度など)

表3 トレーシングレポートのメリット・デメリット

---

メリット・デメリットの内容

---

メリット

- ・病名、体重、BSA(体表面積)の記載があると、外来化学療法中の用量が適切であるか判断できるため、確認のため疑義照会で患者を待たせることなくスムーズに必要な事項確認し、投薬することができる。
- ・抗がん剤のレジメン、投与間隔、理解度などの情報がわかり、投薬がスムーズに進み必要な情報を得られやすくなる。
- ・投与量やレジメン内容が把握できるので、患者との確認が行いやすい。
- ・処方経緯や処方意図が分かり、監査に役立つ。また薬や副作用の説明などが病院と薬局で共有できるため、患者に安心して薬を服用してもらえるようになった。
- ・事前に患者の情報を知ることができるため、服薬指導の質の向上に繋がり、患者が正しく治療を理解しているか確認しやすくなった。
- ・検査値がわかるため、副作用の判断が客観的にできる。

デメリット

- ・トレーシングレポートでの報告ではなく、疑義照会すべき内容なのか判断に迷うことがある。
-